
クリニックの外来診療

クリニックの実施成績

小野良樹

東京都予防医学協会保健会館クリニック

はじめに

東京都予防医学協会(以下「本会」)が運営する保健会館クリニックは、健康保険法による一般外来と専門外来、老人保健法による地域住民の健康審査およびがん検診を実施している。

一般外来は、地域住民の診療と職域での定期健康診断後の有所見者に対する診療と事後指導を希望に応じて実施している。

専門外来は、消化器、肝臓病、循環器、糖尿病、腎臓病、呼吸器、整形外科、乳腺、婦人科、甲状腺、更年期、心療内科および代謝の計13科と小児相談室で構成される。

専門外来の受診者は、本会の1日人間ドック、労働安全衛生法による定期健康診断、学校保健法による健康診断、老人保健法による健康審査などで要精密検査・要受診と判定された人で、当クリニックの受診を希望された人、または一般外来受診者で専門外来の受診を必要とされた人である。

診療には、クリニック常勤医および外部(東京医科大学、慶應義塾大学医学部、東京慈恵会医科大学、順天堂大学医学部、日本大学医学部、日本医科大学、昭和大学医学部、癌研有明病院、東京警察病院、杏雲堂病院)の専門医らがあたっている。

優秀な非常勤医師の協力を得て、小世帯の割には多くの診療業務を実施している。先進的医療が行われる一方、行間の診療が欠如しないよう細心の注意を払っている。最近、診療部門をさらに強化すべく常勤医師の増員を図り、2006(平成18)年は画像診断

専門医を、2008年1月には乳腺専門医をそれぞれ1人ずつ増員した。

看護師は20人在籍している。一般外来、専門外来の看護業務をそれぞれ交代で担当している。本会の看護師は、がんの精検結果の追跡調査を分担して行っており、がん診断の精度管理にも精通している。追跡する項目は、子宮がん、乳がん、肺がん、胃がん、腹部がん、大腸がん、前立腺がんである。各担当の看護師の努力により追跡調査が行われ、がん発見における陽性反応適中度は向上している。

看護師はこのほか、本会内危機管理委員会の下部組織であるリスクマネジメント部会を担当している。この活動により、業務マニュアルは日々更新され、インシデントは減少し、看護業務の健全化が図られている。また個人情報保護法に基づく教育も日常的に行われている。

診療報告

年間総受診者は18,803人である。一般内科の年間受診者は3,300人、(全受診者の17.6%)であった。

専門外来のうち、主だった受診者は乳腺外来1,482人〔同7.9%〕、婦人科外来1,994人(同10.6%)、甲状腺外来3,743人(同19.9%)、消化器外来3,870人(同20.6%)であった。その他、循環器外来、呼吸器外来、更年期外来、心療内科、整形外科、代謝外来、腎臓外来の実数は表1に示すとおりである。主だった専門外来を概説する。

表1 クリニックの月別・科別受診者

(2006年度)

科	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
		一般内科	320	237	289	233	250	248	260	351	270	237	309	296
専門外来	消化器(肝臓含む)	280	245	281	303	308	333	315	347	493	356	292	317	3,870
	循環器	88	97	96	99	110	83	94	72	91	100	113	100	1,143
	糖尿病	54	66	51	62	55	53	60	51	77	65	41	57	692
	腎臓病	11	10	8	12	10	11	11	11	11	12	11	16	134
	呼吸器	57	37	42	53	61	50	50	53	61	38	33	54	589
	整形外科	17	19	16	15	12	19	14	13	17	35	18	24	219
	乳腺	100	107	117	127	144	116	133	144	144	106	113	131	1,482
	婦人科	144	119	195	169	226	210	203	166	173	143	123	123	1,994
	甲状腺	273	232	298	514	342	311	262	309	318	239	284	361	3,743
	更年期医療	38	36	28	43	45	27	42	26	47	28	35	32	427
代謝	52	57	52	56	41	68	64	53	54	48	47	58	650	
代謝	5	11	6	5	11	4	7	6	11	4	4	9	83	
外来栄養指導	1	4	2	3	2	2	3	2	3	3	3	4	32	
小児腎臓病	1	0	5	3	5	7	0	2	3	1	6	2	35	
小児貧血	3	2	3	2	3	3	3	7	3	1	4	3	37	
相談心臓病	5	7	3	7	6	6	7	6	4	6	7	4	68	
心臓病	17	19	3	7	18	5	3	4	2	4	4	6	90	
脊柱側弯症	19	17	13	22	23	9	6	20	20	14	21	31	215	
合計	1,485	1,322	1,508	1,735	1,672	1,565	1,537	1,643	1,802	1,438	1,468	1,628	18,803	

甲状腺外来

担当は百溪尚子部長で、甲状腺分野で世界的に有名な医師である。この外来の特徴は甲状腺に関する最新かつ先端的診療を実施していることである。このため都内はもとより近郊からの来院者が多い。彼女のモットーは“胎児から墓場まで”というものである。大学ではセクショナリズムで実現できないことをこういうクリニックで実践するという。

患者本人に自分の病気について理解を深めてもらうためパンフレットなどを準備し、初診で不安を持っている患者には時間をかけて説明を行っている。それぞれの患者の事情を考慮し、予約は拒まずなるべく希望に添うよう心がけ、妊婦や遠方からの来院者のためには至急で検査を行い、即日判定をするよう心がけている。

また、はがきでデータを送り、次回の指示を出すなど患者の負担を減らす努力をしている。子供のことを心配する両親には家族外来(ファミリー外来とも呼んでいる)を設け、小児科医と甲状腺の専門医が同じ部屋で親子一緒に診察を受けられるよう連携している。さらに、患者のためにバセドウ病教室を開き知識を深めてもらうと同時に、個人の質問にも答え

られるよう会場には出席者のカルテも準備している。

百溪医師以外に岩間彩香医師、井上ゆか子医師ら、いずれも女性医師が担当している。このように患者主体の診療を実施しており、クリニック部門の主役を担っている。

乳腺外来

地域・職域を対象に実施した乳がん検診で要精密検査と判定された受診者、東京都産婦人科医学会の会員より紹介された受診者を対象に、視触診、マンモグラフィ、乳房超音波検査、乳頭分泌物細胞診、穿刺吸引細胞診などにより質的診断を実施しており、「1.5次精検」と位置づけている。

本会の乳がん検診の受診者が増えていることに呼応して当クリニック乳腺外来の受診希望者も増加しており、一方他機関の検診で要精査と言われて予約待ちの間、不安で本会を受診するパターンも多い。本会の受診者で2次精検が必要な方には迅速に基幹病院を紹介し、経過観察が必要な人には不安を与えないで、安心して適切な間隔で検査を受けてもらうように配慮している。この乳腺外来も、主役は女性医師である(詳細は乳がん検診の項参照)。

消化器外来

胃部レントゲン検査からの異常例について胃管内視鏡検査を実施している。表2に示すごとく胃管内視鏡検査実施数は1,695例。うち生検数は697例(41.3%)であった。胃がん発見数は18例を数え、その66.7%は早期がんであった。陽

性反応適中度は1.06%であった。表3は、年度別の胃がん発見数の推移を示しており、2000年42例をピークに斬減している。これは某大規模事業所の脱落によるところが大きい。一方、当クリニックでは東京都に肝臓専門医の届け出を行い、肝臓専門外来も併設した。現在、B型肝炎療法の薬物療法、C型肝炎のインターフェロン療法を実施中である。

婦人科外来

長谷川壽彦医師、伊藤良弥医師を中心に診療を実施している。東京産婦人科医会の会員より紹介された受診者、および本会で実施した地域住民と職域の1次検診で子宮頸部細胞診のPapニコロウⅢa以上の受診者を対象にコルポスコピー検査、細胞診および組織診を併用して子宮頸がんの早期発見に努めている。(詳細は子宮がん検診を参照)

代謝外来

ユニークな外来で現在、女子栄養大学院大学教授の大和田操医師が担当している。新生児マス・スクリーニングから抽出したアミノ酸代謝異常症(フェニルケトン症など)や学校保健で抽出した2型糖尿病などを対象に小児から成人に至るまでの成育医療を実施している。

おわりに

当クリニックの特徴は地域を対象とした一般診療とは異なり、独特な形態を呈している。受診者の多くは検診からの要精密検査対象者のうち当クリニッ

表2 胃・内視鏡検査月別実施数

		(2006年度)												
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
実施数	集 検	36	22	46	54	82	47	99	111	47	27	47	47	665
	外 来	75	67	79	78	89	91	61	74	106	111	99	100	1,030
	計	111	89	125	132	171	138	160	185	153	138	146	147	1,695
生 検	食 道	0	1	0	0	1	0	0	1	2	2	0	0	7
	胃	34	34	35	36	35	42	31	30	36	40	38	31	422
	計	34	35	35	36	36	42	31	31	38	42	38	31	429
腫瘍発見数		0	1	2	2	2	0	0	1	1	1	5	3	18

表3 年度別の消化器外来の受診者数と胃内視鏡件数・生検数・がん発見数

(1983～2006年度)				
年 度	消化器外 来受診者	胃内視 鏡件数	生検数	が ん 発見数
1983	3,231	408	40	13
1984	3,064	398	58	11
1985	3,795	366	148	8
1986	3,634	326	135	15
1987	3,611	313	80	12
1988	4,778	554	194	13
1989	5,080	614	290	21
1990	6,544	1,046	560	39
1991	5,858	1,616	1,086	39
1992	8,303	1,552	981	32
1993	8,393	1,490	962	29
1994	9,352	1,909	1,267	40
1995	8,458	1,671	1,010	36
1996	7,835	1,740	1,165	32
1997	8,171	1,702	1,082	30
1998	8,399	1,671	1,140	40
1999	7,459	1,549	1,004	28
2000	6,936	1,610	941	42
2001	6,574	1,739	1,111	29
2002	6,635	1,679	931	23
2003	4,278	1,531	757	18
2004	4,113	1,623	737	10
2005	4,027	1,743	708	21
2006	3,870	1,695	697	18

ク受診希望者で、このため受診者の居住区は都内多岐におよんでいる。各種精密検査(がん診断)に対応するため、各専門医を配置している。

がん診断には当然、精度管理が伴う。現在、精度管理向上のため本会内に、精度管理委員会を立ち上げ鋭意努力を重ねており、この結果、年度ごとに陽性反応適中度(発見がん数/要精密検査数)は上昇している。同委員会での主要な対策としては、疑陰性、疑陽性の押さえ込みを図ることと、追跡調査の実施率を上げることである。現在この目標に向けて、医師、看護師および医事課スタッフが共同して取り組んでいる。